

## “クラゲの多い年はイボダイがよく獲れる”は本当か

海洋生産技術担当 主任研究員 安藤大輔

**Key word:** ミズクラゲ, アカクラゲ, イボダイ

---

### はじめに

瀬戸内各地では、しばしばクラゲが大量発生します。徳島県では報告が少なくなりましたが、クラゲの大量発生は漁獲物の汚染や漁具の損壊といった漁業被害をもたらします。また、網に引っ掛かったクラゲが乾燥・飛散し、その粉が体や目鼻に付着して漁業者に不快感をもたらすので、厄介者として嫌われる生物です。

その一方で、クラゲを有効活用する生物も多くいることが知られています。イボダイはその代表例で、「クラゲの多い年はイボダイが多く獲れる」とされるほか、イボダイの幼魚がクラゲを隠れ家にしたたり、餌として利用することが報告されています(安田, 2007)。水産研究課は2008年以降クラゲの目視調査を実施しており、収集したデータをもとにクラゲとイボダイの関係を検証してみました。



写真. イボダイ

### <クラゲ目視調査>

2008～2021年の3年間、徳島県沿岸9定点の各点を漁業調査船「とくしま」で5ノット×5分間航行し、左舷から5 m の範囲内で目視で発見したクラゲ(アカクラゲ, ミズクラゲ)をカウントしました。クラゲ発見数はイボダイ主漁期前(5～7月)のものを海域別に平均してクラゲ密度(匹/観測点)としました(図1)。

### <イボダイ資源状況調査>

紀伊水道でイボダイを多く水揚げするA漁協の販売データのうち、イボダイ主漁期(8～10月)の小型底曳き網漁業によるものを抽出しました(2008～2021年)。抽出したデータをもとにCPUE, すなわち単位漁獲努力量あたり漁獲量(kg/出漁隻・日数)を算出して資源状況の指標値としました。

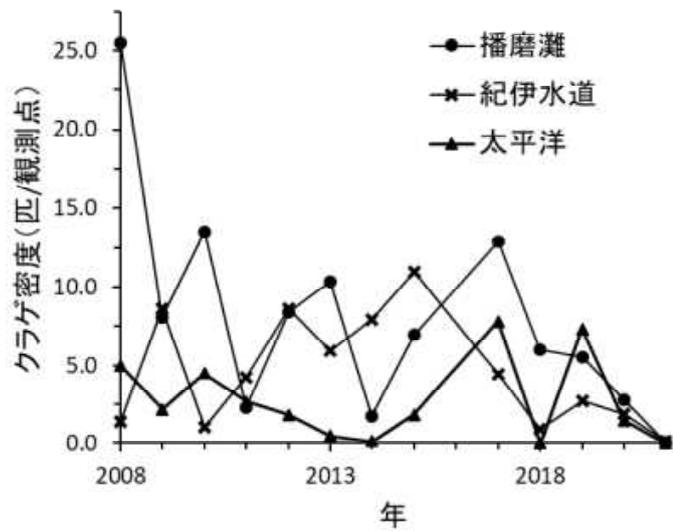
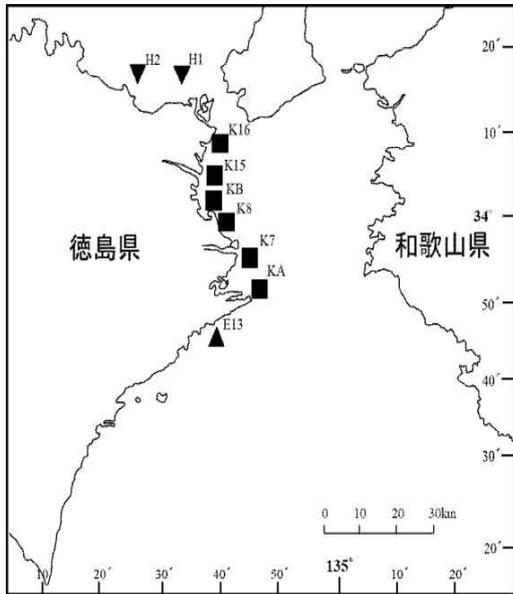


図1. 左：クラゲ観測点 右：クラゲ密度の経年推移 (左)

## 結果

イボダイ CPUE と紀伊水道および播磨灘のクラゲ密度を対比したところ、両者に強い正の相関がありました (図2)。つまり、“クラゲの多い年はイボダイがよく獲れる”といえます。また、瀬戸内海東部で漁獲されるイボダイのほとんどは当歳魚 (その年生まれた個体) ですから、試験結果は、瀬戸内海東部においてクラゲ密度がイボダイの加入量 (新たに魚群に加わる魚の量) の水準を予測する指標になることも示しています。

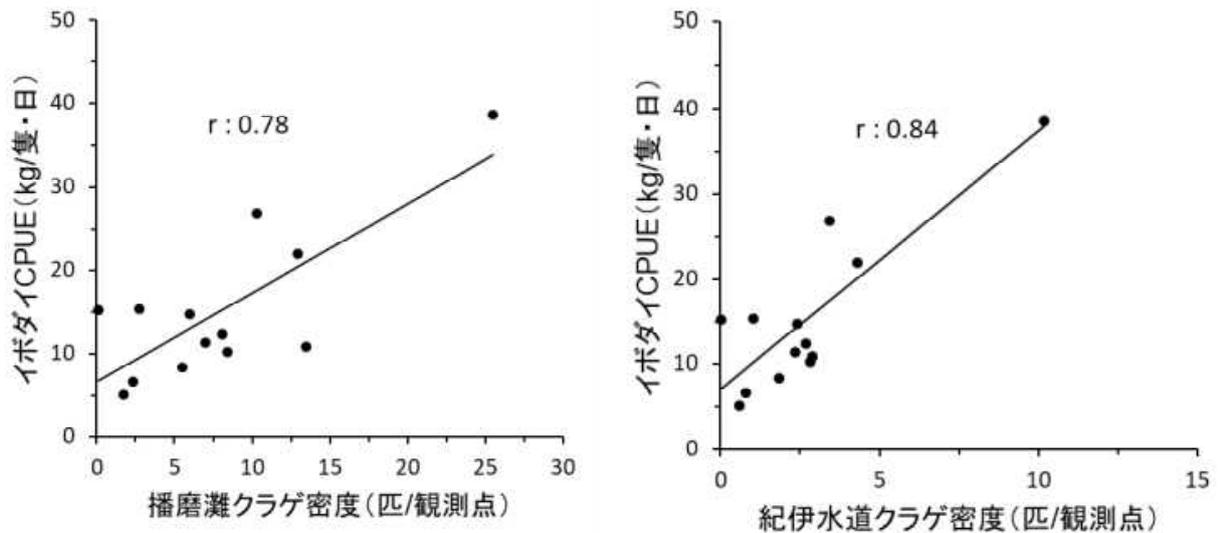


図2. クラゲ密度とイボダイ CPUE の相関関係

## 終わりに

魚などの海洋生物を直接調べることはとても困難ですが、海面を漂うクラゲは比較的容易に調べることができます。クラゲも海洋生態系の一部ですから、クラゲを調べることでイボダイ以外の資源変動を予測できるようになるかもしれません。

たとえば、瀬戸内海においてクラゲはカタクチイワシと餌をめぐる競合関係にあることが指摘されており（永井，2005），クラゲがカタクチイワシを餌として利用するタチウオ資源などの指標になる可能性もあります。試験結果はクラゲとイボダイの直接的な関係を示すものではありませんが、両者にとって好ましい海の状況などを調べれば、複雑な海洋生態系の一部を解明できるのではないかと期待しています。今後も調査を継続・発展させると共に、水産資源の動向把握に注力したいと考えています。

## 参考文献

安田徹（2007）. エチゼンクラゲとミズクラゲ—その正体と対策— 成山堂書店

永井達樹（2005）. 瀬戸内海の富栄養化とクラゲ類の増大について 日本プランクトン学会報 第 52巻 第1号 27-31